

大学生主体の課外活動が授業実践力および 人間関係構築に及ぼす効果

富田 幸子・真田 穰人

Effects of University Student-centered Extracurricular Activities on Practical Teaching Skills and Building of Human Relations

TOMITA Sachiko and SANADA Shigeto

Abstract: For university students, it is difficult to build human relations as they did in high school because there is no class space. Therefore, many students find their place in extracurricular activities that do not get credits, but in which they can participate voluntarily. In the past few years, the corona has begun to show some signs of abating, and extracurricular activities at the university have finally resumed in their original form. The S Study Group, which consists of members from several universities in the Kansai area, conducts visiting lectures to local schools. According to the textual analysis of the output of the study group members after the class, words related to peers, seniors, and juniors were extracted as frequently occurring words. It is clear that the activities of the S Study Group activities, in which the effects of peer support were found, not only helped the students learning teaching skills, but also created a positive attitude toward the activities and promoted smooth human relationships.

Key Words: Peer Support, Visiting lecture, Extracurricular activity, Human relations

要旨：大学生にとって、学級という空間がないため、高等学校までのような人間関係作りは難しい。そこで、単位を伴うものではないが、自主的に参加できる課外活動に自分の居場所を見つける学生も少なくない。ここ数年、コロナも収まりの兆しをやや見せ始め、大学における課外活動もようやく元ある形で再開されるようになった。関西圏の複数の大学のメンバーから構成され、地元の学校へ出前授業を行う S 研究会では、出前授業の企画、練習、振り返りなどの活動が学生によって主体的に行われている。授業後にあげる研究会メンバーの感想のテキスト分析によると、同輩、先輩、後輩に関する語が頻出語として抽出された。ピア・サポートのはたらきがみられる S 研究会の活動は、学生に授業スキルの習得につながるだけでなく、活動へのポジティブな姿勢を生み出し、円滑な人間関係の構築を促進していることが明らかになった。

キーワード：ピア・サポート、出前授業、課外活動、人間関係づくり

1. 研究の背景と目的

ボランティア活動、サークル活動などに代表される課外活動は、大学生が自らの意思で選択し参加する活動である。辻（2019）は、課外活動を「単位・履修を伴う講義や演習など以外」の活動

を意味するものであり、大学として学生の主体的な学びを認めることができる活動と定義する。ここでは、自分の所属とは異なる学部生との交流や大学の枠組みを超えた活動が可能であり、多様な学びを獲得し人間関係を広く結ぶ上でも有益な場となることが推察される。

石本ら（2023）は、日本の大学生は多くの時間

を課外活動に費やしており、大学生が大学在学中に獲得する力は、正課内の活動だけではなく、課外活動の影響も受けており、課外活動の経験が青年の発達や適応に多くの影響を与えていると論じている。小幡 (2019) は、課外活動がコミュニケーション能力形成に影響を与えると述べている。東海大学の新聞 (WEB 版) でも、「他学年・他学部の人とも知り合いになれた」「大学生活が充実した」「学業以外の活動をすることで視野が広がった」「多くの仲間と出会い、皆で一つの目標に向かって取り組むことができ、充実した生活を送ることができた」など、課外活動に参加したことによる利点が紹介されている。佐々木ら (2024) は、課外活動に所属している学生のメンタルヘルスは、所属していない学生に比べて、全般にメンタルヘルスが良好であり、未所属の学生は学業への躓きや充実感の乏しさを感じている点を指摘している。

このように様々な利点が考えられる大学の課外活動であるが、中学・高等学校の部活動のように、生徒に密着し指導する顧問が存在するわけではない。そうした体制の中で、大学での課外活動をより発展的に継続的に展開していくには、大学生自身の活動に対する自主的な姿勢とともに、大学生間での人間関係づくりの構築が、いかになされるかという点が重要な要素となってくる。すなわち、同輩・先輩・後輩といった仲間同士での結びつき、働きかけが、大学生自身でいかに構築できるかにかかっているといえる。

そうした仲間同士の結びつきを大切にしつつ、大学の枠を超えて行う課外活動の 1 つに、S 研究会の活動がある。この研究会の活動は、大学生が主体となり、関西圏中心に小・中・高等学校を訪問し、情報モラル授業を行うものである。S 研究会は 2024 年度現在、5 つの大学のメンバーから構成され、活動のメインとなるのが、スマホ・ネット問題を扱った小・中・高等学校への出前授業であり、年間約 300 回実施されている。

昨今の学校では、小学 1 年生から一人一台のタブレットなどの端末を持ち、インターネットの使

用は、子どもたちの日々の生活に密着するものとなっている (富田・真田, 2024)。有益な点も多くあげられる一方、活用の仕方によっては、インターネットがらみのトラブルがあとを絶たない現状がある。

このような子どもたちを取り巻く環境の変化の中で、インターネットの活用について考える学びの機会は重要視され、各学校でも、情報モラル授業が盛んに行われている。これらの授業は、大学教員やインターネット研究の専門家など主に外部講師を招き実施されるケースが多い中で、小・中・高校生と年代の変わらない大学生が授業を行う点に、S 研究会の特徴がある。

S 研究会の出前授業の実施後には、S 研究会のグループ LINE に授業を担当した大学生から思いを言語化した感想が寄せられる。そこでは、授業実施後の自らの感想や反省、実施するまでの経緯など様々なエピソードが語られ、次の自分の課題を示した感想が多い。

この研究会にかかわる学生には、出前授業の活動を通して、授業実践のスキルだけでなく、自己の成長を感じ取り、よりポジティブな姿勢で挑戦していく様相がみられる。そうした学生たちの変容の要因の一つに、研究会の活動の中に、仲間力に基づいたピア・サポートの効果が働くことが推察される。

ピア・サポートとは、仲間が仲間を支援する働きかけを意味するものであり、「同じ立場にある・同じ課題に直面している仲間としての支えあい」厚生省 (2022) である。ピア・サポート学会のホームページでは、「ピア」とは仲間を意味し「サポート」とは支援することと述べられている。さらに、「誰もが成長する力を持っている」「誰もが、自分で解決していく力を持っている」「人は実際に人を支援する中で成長する」という考え方のもと、ピア・サポートは、同世代・先輩・後輩など、同じ活動を共にする中で、仲間としてよりよくサポートする「仲間力」に基づいたものであると論じられている。

松田 (2021) は、「仲間支援を活用する考え方

は、早くからイギリスやアメリカの学校教育現場で行われており、日本におけるピア・サポートは、1980年代に入りアメリカ・カナダを始めとする英語圏から来日する外国語助手によって、仲間支援の活動内容や概念が伝えられピア・サポートの考えが少しずつ導入され始めた」と述べている。

昨今、ピア・サポートは、大学教育においてもさまざまな大学で導入され始めている（岡本，2011）。ピア・サポートを実施する大学が増えている理由に、1. 大学進学率の上昇によって学生が多様化、2. 社会情勢を背景に、心の問題が深刻となり、大学でもケアを行う必要性の出現、3. 学生を大学運営に参画させ、よりよい大学を作っていこうとする機運の高まりがあげられる（公益財団法人大学基準協会，2023）。

本研究の目的は、出前授業実施後にグループLINEに寄せられた授業者である大学生の思いを言語化した感想から、次の点を明らかにしたい。

研究会の活動にはどのような特徴があるのか、また、研究会の学生たちは、出前授業を中心とする活動を通して、どのような思いを抱き、どのような力を身につけているのかについて検証する。

2. 情報モラル授業実践の概要

2-1 実施日

2024年4月～8月

2-2 対象

関西都市圏の小中学校の児童・生徒

2-3 実施までの流れ

S研究会では、上学年になった大学生の一部が、会運営のための独自の役割を担っており、授業実施までに、次のような流れがある（Table 1）。

研究会に寄せられる情報モラル授業の申し込みに対して、授業担当を決める役割を担う学生が、研究会所属の大学生に向けて募集を行い授業

Table 1 出前授業実施までの流れ

活動		具体的な中身
1	教材開発	授業で使うスライド作成
2	授業者振り分け	依頼があった授業に対して担当者を募集し、決定
3	授業者担当者間の練習	授業担当者同士（2～3名）での繰り返しの練習
4	定例会を中心とした日々の活動	週1回研究会全体で行われるミーティング（オンライン参加可） 近況報告や模擬授業発表。先輩などが披露する授業に焦点を当て、それぞれに講評しあうなど、互いに学びあう機会
5	授業実践後の課題	研究会のグループLINEに授業後の感想、反省等感じたことをあげる

※1.2についてはそれを担う役割担当者が存在

者決定までを行う。

1回の授業を大学生は2～3名で担当する。授業担当者が決まると、担当者間でオンラインなどを活用して、打ち合わせ及び授業の練習を繰り返し行い、本番の授業に臨む。

授業で使う教材は、授業づくり担当班の学生たちで制作したパワーポイントを使ったスライドが中心である。

授業を終了した大学生は、研究会のグループLINEに報告として感想をあげ、研究会全員で共有する。

S研究会の代表は大学教員が務めており、学生同士の交流の場を設けたり、適時アドバイスや励ましを与えたりなどもあるが、出前授業の指導には積極的に関わらない姿勢で臨む。すなわち、授業の申し込みを受けてから本番の授業実施に至るまで、学生が主体となって行う。

授業後には、授業実施校の教員など、授業を見学した大人より、授業のアドバイスや感想が寄せられることも多い。

2-4 授業内容

S研究会で行う授業の形態は、大きく分けて次の2パターンがある。

A タイプは、S 研究会の学生たち自らが出演し制作したオリジナル動画をもとに行う授業、B タイプは、K 社制作のアニメ動画をもとに行う授業である（Table 2）。

3. 調査対象と調査時期

3-1 調査対象

関西都市圏の 5 大学から構成される S 研究会に所属し、小学生、中学生、高校生を対象に情報モラルに関する授業を行った大学生 26 名（男性

Table 2 2024 年度 情報モラル授業の中身

1	導入	授業を受ける体制づくり雰囲気づくりとして授業者の自己紹介	
2	授業の目的説明	便利ではあるが、リスクも伴うインターネットの賢い使い方を考える機会であるという授業の目的を伝える。	
3	事例の説明 ビデオ視聴	A タイプ (主として K 市 A 市の小学校で実施) 研究会制作のオリジナル動画視聴 「ネットでの出会い」 「ネット依存」視聴	B タイプ (主として関西圏の小・中学校) K 社制作のアニメ動画視聴 「ネットでの出会い」
4	意見発表	生徒自身に何がよくなかったかを考えさせ、意見発表を求め交流する。	
5	対象方法の説明	インターネットによる被害トラブルにあった時の対処方法の説明をする	
6	まとめ	インターネットを使う際、大事なものは「正しく怖がり賢く使う」といった使い方を心掛け、リスクをきちんと知る必要性をおさえる	

Table 3 授業後コメントに関する抽出語（上位 100 語）

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	594	多い	53	話	37	終わる	25
思う	224	見る	52	アドバイス	36	集中	25
行く	163	人	50	楽しい	35	大切	25
子どもたち	162	本当に	50	対応	35	入れる	25
時間	123	声	49	考える	34	問いかける	25
同輩(個人名含む)	119	話し合い	49	頑張る	32	姿	24
今日	116	メンバー(個人名含む)	48	KDDI	31	不安	24
コマ	114	言う	48	動画	31	意識	23
今回	114	市教委	48	話す	31	活動	22
先輩(個人名含む)	108	お疲れ様	47	気	30	全体	22
先生	105	尼崎	45	緊張	30	伝わる	22
後輩(個人名含む)	91	少し	44	気持ち	29	分かる	22
感じる	87	出来る	43	たくさん	28	使う	21
発表	84	言葉	42	ネット	28	当てる	21
子ども	83	初めて	42	パート	28	必要	21
トピック	76	ありがとう	41	最後	28	部分	21
自分	75	行う	41	事前	28	トラブル	20
伝える	73	持つ	41	出る	27	沢山	20
学校	72	反省	40	スライド	26	特に	20
聞く	69	練習	40	意見	26	流石	20
教材	68	嬉しい	39	内容	26	高校	19
良い	65	経験	39	マイク	25	進める	19
一緒	58	手	39	環境	25	難しい	19
神戸	55	生徒	39	今後	25	確認	18
前	54	反応	39	今年度	25	姿勢	18

10名、女性16名)。

3-2 調査時期

2024年4月～8月

4. 調査内容

調査協力者が小学生、中学生、高校生を対象に情報モラルに関する授業実践後に研究会の活動をグループLINEに送信、研究会メンバー全体で共有した授業実践後の感想を用いた。

5. 分析方法

本研究では、情報モラル授業実施後に、研究会のグループLINEにあげられた自由記述の感想に対して、KH-Coder(樋口, 2020)による分析を行い、頻出語を抽出するとともに、共起ネットワーク分析を行い、共起関係を探索した。

6. 手続き

今回の研究にあたっては、研究会で行っている授業実践後の感想を用いるが、①感想を書いた個人が特定されるものでないこと②調査内容は、研究の目的にそったもののみ使用されることを伝えた。

7. 結果

7-1 授業感想の内容分析(1)

全体的傾向

大学生のべ88名分のテキストデータの総テキスト数は38,007語、総語彙数は、2,675語であった。テキストデータを総合的に把握するために、KH-Coderで抽出した頻出語について、上位100語のものを表にまとめた(Table 3)。

頻出語には、「授業」、「子どもたち」、「時間」、「発表」等、情報モラル授業の内容に関わる言葉とともに、同輩(個人名含む)、先輩(個人名含

む)、後輩(個人名含む)、メンバー(自分とは違う日時・場所で授業をした学生、個人名を含む)等、授業をともに担当した仲間や、別の場所で授業実践をした仲間、授業準備を手伝ってくれた仲間等に関する言葉が多く見られた。また、「お疲れ様」や「ありがとう」といった授業者ペアやメンバーに対する言葉とともに、「嬉しい」や「楽しい」といった肯定的な感情に関する言葉も見られた。

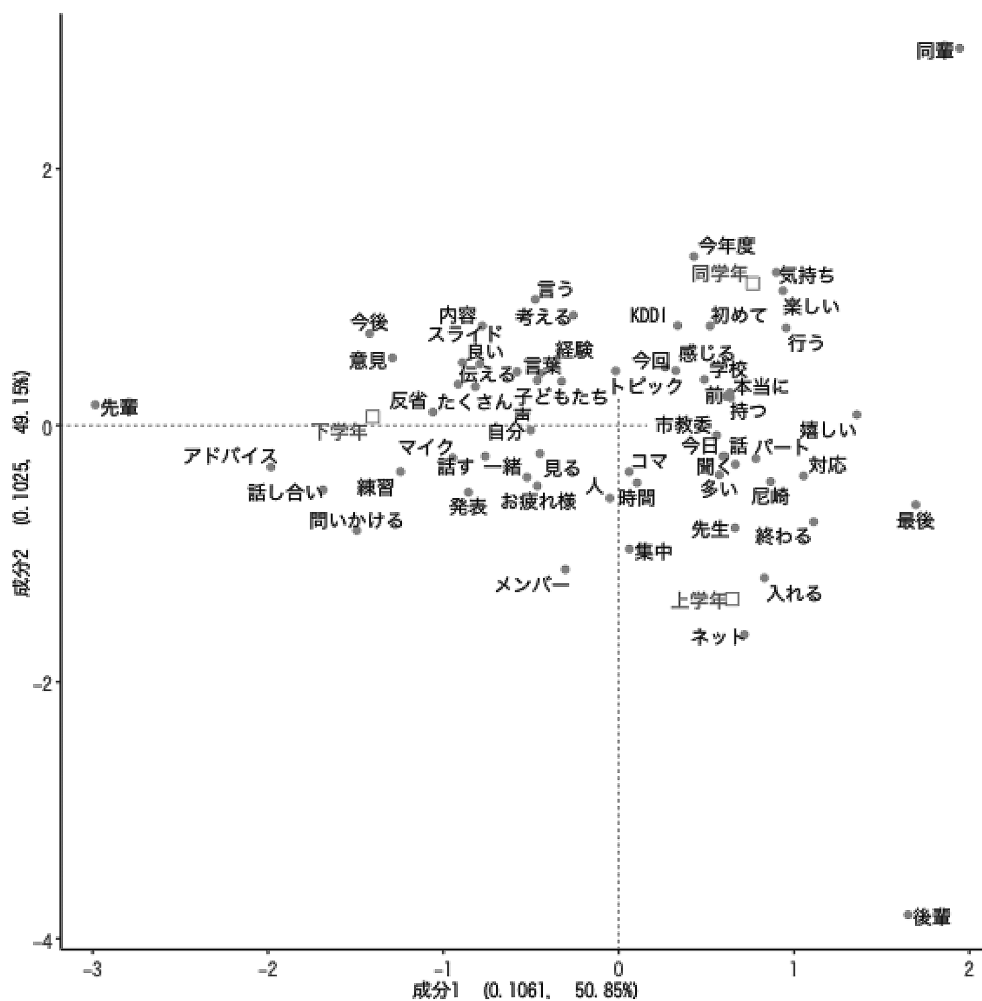
また、語の最小出現回数が15以上で、Jaccard係数0.39で共起分析を実施した(Figure 1)。強い共起関係が認められた結びつきは、以下の通りであった。「授業」-「メンバー」-「お疲れ様」-「教材」-「伝える」-「自分」-「同輩」、「発表」-「言葉」-「話し合い」-「手」-「先輩」-「思う」、「良い」-「反応」-「トピック」-「感じる」-「学校」-「時間」、「本当に」-「ありがとう」-「反省」。

7-2 授業感想の内容分析(2)

ペアに対する自身の立場(下学年-同学年-上学年)と授業感想の関連

下学年群、同学年群、上学年群ごとに特徴語を抽出した(Table 4)。下学年の特徴語には、「先輩」、「話し合い」、「発表」、「反省」、「アドバイス」等の言葉が、同学年の特徴語には、「同輩」、「教材」、「楽しい」、「子どもたち」や「子ども」等の言葉が見られた。上学年の特徴語には、「後輩」、「時間」、「対応」、「難しい」等があった。

また、授業ペアに対する自身の立場が、授業後の感想に及ぼす影響を検討するために、対応分析を行った(Figure 2)。その結果、下学年群では、特徴語に見られた「先輩」や「アドバイス」、「反省」の言葉に加えて、「練習」や「今後」、「自分」などの語が近くに配置されていた。一方、同学年群では、特徴語に見られた「楽しい」に加えて「今年度」や「気持ち」の語が、上学年群は「ネット」や「入れる」、「集中」などの語が近くに配置されていた。



しか成立しない学びには、仲間の存在、仲間との関係の中に「互恵性」、「対等性」、「自発性」の3点を必要なものとしてあげている。

「互恵性」とは、仲間それぞれが互いに恵みを与えるあう関係にあることを意味し、お互いが学び手にも教え手にもなり、恵みをもたらしあいながら学習が深まっていく特質である。「対等性」とは仲間が同じような立場の仲間であることで、立場が同じであるがゆえ、意見が表明しやすくお互いのことを受け止めやすくなったりするよさがあるとしている。さらに「自発性」とは教師がイニシアティブを持ち、学習を導いていく一方向的な関係でなく、自分たちで考えを出し合い、問題解決の過程を自分たちで進めていく学びの側面を指すものと論じている。

S研究会の活動は、出前授業の決定から最後の振り返りまで、大学生が主体となって実施する。

研究会の代表である教員は、授業実施に向けた環境の準備などの裏方に徹し、授業を申し込んだ学校（教員）側である大人からコメントをもらうのも、授業実施後である。

研究会内での仲間の存在、仲間と関係には、上記の必要な3つの特質すべてをみることができ、そこには、「大人主導で『好ましい人間関係』」(滝, 2004)をつくろうとする動きがない。

年代が違っても、出前授業を行うという同じ目的を持った対等な立場に立ち、「仲間同志が支えあい、支援を受ける側もお互いに成長していく、しかも、支援される側、される側の関係は固定的でない」(春日井ら, 2020)という、まさにピア・サポートの特徴がみられる活動となっている。

8-2 授業の中で大学生が大切にしていること

グループLINEにあげられた出前授業後の感想には、全体的傾向として、一緒にペアを組み授業を行った「同輩」、「先輩」、「後輩」の個人名をあげながら、「授業」「子どもたち」「時間」という言葉が頻出していた。

「元気な子どもたちと楽しく授業をすることができましたが、どの学校でも45分間いっぱい時間を使えなかったので、いかに言葉を厳選し授業を行うかを意識させてもらえたなと思います」「一人ひとりの顔を見ながら授業することや、話すスピードや声のトーンを変えることを意識して授業を行いました。どの子どもたちも集中して話を聞いてくれたり、動画の流れに反応しながら見てくれたのでとても嬉しかったです。まだまだ時間管理には慣れません」

出前授業の中で、子どもたちのために、授業をわかりやすく伝えるという目標を持ちながら、時間内に授業をやりきること、そのためには時間管理が必須という意識が、授業者である大学生には強い。学校での授業と違い、1回限りの授業である。その時間内にいかに収めるかを課題とし、各自責任をもって努めようという姿勢がうかがわれる。

頻出語の強い共起関係としては、「授業」-「メンバー」-「お疲れ様」-「教材」-「伝える」-「自分」-「発表」-「言葉」-「話し合い」-「手」-「先輩」-「思う」、「良い」-「反応」-「トピック」-「感じる」-「学校」-「時間」、「本当に」-「ありがとう」-「反省」の4つがあげられた。

「授業」-「メンバー」-「お疲れ様」-「教材」-「伝える」・「自分」のグループにある「お疲れ様」は、感想の一番初めに出てくる言葉である。自分とは、別の場所や違う日時に授業を実施した「メンバー」にむけての労いであり、共に頑張っていることを認め合う言葉といえる。

「教材をもらって約1週間、前例のない教材のためお手本がなく、自分のパートでは、本番で伝えたい事については伝えることができました」「新教材になって初めての授業、自分の伝えたい

事をより正確に伝えるために言いかえたりしました」からは、教材の中身を相手に伝える点に重点を置き、授業を工夫しながら自己のスキルアップを図っていることがうかがわれる。

「発表」-「言葉」-「話し合い」-「手」-「先輩」-「思う」グループに関連する感想としては「発表の時には手があがりやすく不安な気持ちにはなりましたが、先輩と連携して話し合いの時間に聞こえてきた意見を自分たちでマイクを通して共有するなどの対応ができました」「発表ではたくさんの手はあがらないし、問いかけに対する反応も少なく、話し合いさえ弾まない学校があり、言葉を変えながら話しました」などがある。児童・生徒の発表が思うように弾まないケースでも、一方通行にならない授業の工夫を試みながら臨むことで、自己の授業力のスキルアップにつながる体験になっていることが推察される。

「良い」-「反応」-「トピック」-「感じる」-「学校」-「時間」のグループに関連する感想としては「今日は、どのトピックでも手が上がり反応が良かったのですが、そのせいで、話し合いの時間を長くとりすぎてしまいました。時間管理は難しいと感じました。」といった記述があり、授業の進行の難しさを感じとったことがうかがわれる。

4つ目のグループである「本当に」-「ありがとう」-「反省」のうちの「ありがとう」は、「本当に」「反省」という言葉とともに、授業を共に担当した仲間や、授業準備の手伝い、練習に付き合ってくれた仲間、授業をするにあたって裏で働いてくれた教師や大人などへの感謝の思いを表出したものである。より強い仲間意識を生み出す人間関係の構築につながっているものと考えられる。

一回の授業に行くのは2~3名であるが、その授業を終えるまでに多くの人とのかかわりがあり、協力がある。出前授業は、そのことの重みを感じ取り、感謝の気持ちを抱きながら、授業実践力をあげる自らの成長を体感する場となっており、活動に対する大学生のポジティブな感情を高めていることがうかがわれる。また、「失敗付きの練習も含めて学生同士の関係の中で行われるこ

とでより効果を発揮」(春日井ら, 2020)とあるように、うまく進められない授業実践であっても、授業を行った者同士が、対等の立場で率直に語り合い、反省することで、次の課題が明らかになっている。

8-3 異年齢集団での学び

S 研究会は先輩・後輩といった異年齢集団で構成されている。年代ごとの立場でみていくと、上学年の感想には、「後輩」が一番の特徴語となっている。

「後輩の Dくんは、練習の時から沢山アドバイスもスライドを完成させる作業もしてくれて、本当に頼もしかった」「Mくんは、初授業で緊張していると言ってたけど、子どもたちを前にすると楽しんで授業をしていました。私が1年前先輩に授業の楽しさを教えていただいたように、今回の授業をきっかけに Mくんも沢山授業に行ってくれたら嬉しい」「Cさん(後輩)は、練習の時から何回もつい聞きたくなるような授業で、教材研究がしっかりできていて、私も見習いたいほどです」など、上学年の感想には、「後輩」の持つ個別な特徴を捉え、支える傾向がみられる。

上学年の大学生は、「年長者をお手本にして育った成果を、年長者になってから発揮する」立場である(滝, 2004)。すなわち、上学年は、後輩の授業の中に、弱点や課題を抱えていたかつての自分を見出し、先輩から受けた様々な刺激やアドバイス、そこから歩んできた自己の成長を思い起こしながら、後輩たちへ様々な気づきを伝える側にいることがうかがえる。

さらに、「実は今日、初めて後輩と授業でした。今までは先輩や同輩と行かせてもらうことが多かった授業で、連れて行けるだけの力量が持っているのか不安になりましたが、自信を持って授業ができるようにこれからも頑張っていきたい」「後輩と一緒に授業に行く機会も増えて、先輩として私が引っ張っていくべき箇所はあると思いますが、みんなで支え合いながら授業をしてクオリティを上げていけたら良いな」といった感想から

は、後輩をリードしながらも、活動の中で新たな課題を見つけ、さらなる自己の成長を目指す上学年の様相がみられた。

同学年の感想では、「同輩」という言語が多く出現する。そもそも大勢の子どもたちを前にして授業を行うこと自体、緊張を伴うものであるが、「同輩」と一緒に授業をするという安心感の下、「同輩の授業は楽しかった」「同輩のかっこいい姿を目に焼き付けた」とあるように、同学年のペアで行った授業後の感想には、同輩生を意識しながら、出前授業自体を楽しむ傾向がみられた。

下学年の感想には「先輩」という言葉が特徴語として頻出する。「まだまだ自分にはできないけど、子どもの声を拾って授業する先輩ってさすがだな。」「ジェスチャーも沢山あり、問いかけるような授業をされていて私もいつかこんな授業が出来るようになりたい」「様々な状況に応じて臨機応変に動いており、経験の賜物なんだろうなと感じました」など、先輩への憧れ、今後自分が目指したいロールモデルを見いだす様相がみられた。上学年の大学生にとって、下学年からのそうした尊敬のまなざしを受けることは、「自己有用感を獲得していく機会」(滝, 2004)となることが推察され、任されたことをやり遂げる責任感にも繋がっていくものと考えられる。

対応分析によると、下学年群では、特徴語に見られた「先輩」や「アドバイス」、「反省」の言葉に加えて、「練習」や「今後」、「自分」などの語が近くに配置されていた。

「待望の初授業。アドバイスを受けて、やれるだけやろうと・・・諸先輩に迷惑をかけたことを反省、糧にし、精一杯努めさせていただきました。まずは大きな一歩を踏み出せたことが自分の中では大きいです。」「先輩が『時間は私が調整するから気にせんでいいからね!』とおっしゃっていて、先輩はすごいな～と漠然と思っていたのですが、今回、私も先輩方の様に時間通りに終わらせることが出来、成長を感じました。今回の授業で自分の成長を実感し、段々自信がついてきました! 今後も授業に行くので、もっと成長出来るよ

うに頑張ります」とあるように、「先輩」の存在を意識し、少しでも近づきたいといった姿勢がみられる。

同学年群では、特徴語に見られた「楽しい」に加えて「今年度」や「気持ち」の語が近くに配置されていた。「今年度初めての授業で緊張しました。授業を行うのは難しいなと感じると同時に、同期や授業によく行ってる人達に早く追いつきたいと感じました」など頑張っている仲間を意識しながら自分も成長していきたいというポジティブな姿勢がみえてくる。

上学年群では、「ネット」や「入れる」、「集中」の語が近くに配置されていた。「1校目は、ネットトラブルということで、本当にあったトラブルの例を入れると身近に感じやすいのか、子供達の食いつきも良く集中していました。時間があれば入れる手札にしたいです。」など授業をより充実させようとする上学年ならではの目標で臨んでいる実態がみられた。

このように、異年齢で構成された集団での活動を通して、年代を超えてそれぞれが刺激やアドバイスを受け、円滑な人間関係が構築されていく。自己の成長を実感しながら、今後自分がどうなりたいかなどのモデルを見出し、次の課題に向けて取り組もうとする姿勢がみてとれた。

9. まとめと今後の課題

大学生が悩みを抱いた際に、相談相手として友人や先輩、知人を選ぶ割合が高くなると言われるが、岡本(2011)は、学生のライフスタイルの変化やコミュニケーションのあり方の変化などから、こうした機能が大学生活において、自然発生しにくい状況があることを指摘する。

2024 年時点において、コロナが比較的落ち着き、部活動やサークル活動も再開されるようになってきたものの、1、2 年生の所属率は、コロナ禍前の所属率には戻っていない実態がある(全国大学生活協同組合連合会, 2022)。

課外活動の中で、居場所を見つける大学生も多

く、課外活動の充実は重要である。山田(2022)は、大学の様々な課外活動を「十分に自己形成を遂げていないと批判される大学生が自分たちで形成の場を創出している活動空間である。」とし、「そのために重要となるのは、小さくはあるが貴重なケースの分析に適した理論的装置の発掘」の必要性を論じている。

今回は、S 研究会で行われる出前授業後に言語化された感想に注目し、今現在も学生たちが、ピア・サポートによる効果を生かしたこの活動を主体的に、ポジティブな姿勢で取り組んでいる実態を明らかにできた。

ただ今回取り上げたデータは、グループ LINE にあげられた感想に限定している。今後は、大学生へのインタビューなどデータを多角的に検討することで、大学生の成長をさらに追っていきたい。

引用文献

- 1 辻多聞：大学生および大学における正課外活動の位置付け，大学教育 16, pp.17-24, 2019
- 2 石本雄真・原田新・山根隆宏・日潟淳子・王松・田仲由佳：大学生の正課外活動経験の諸側面が汎用的技能に与える影響，日本教育工学会論文誌 47 (2), pp.185-195, 2023
- 3 小幡直弘：課外活動が大学生のコミュニケーション能力形成に与える影響，日本心理学会大会発表論文集 83(0), p.167, 2019
- 4 東海大学新聞 WEB 版：課外活動でキャンパスライフの充実を，<https://www.tokainewspress.com/contents.php?i=102>, (参照日 2023. 9. 10)
- 5 佐々木瑛・青木隆・佐藤進・村田俊也・鈴木貴士・畝本紗斗子：大学生の様々な課外活動とメンタルヘルスの関係，工学教育研究 KIT progress 32, pp.1-10, 2024
- 6 富田幸子・真田穰人：情報リテラシーを育成する授業プログラムの検証ーデジタル・シティズンシップ教育の視点からの情報教育ー，甲南女子大学研究紀要 I 60(1), pp.179-188, 2024
- 7 厚生省：ピア・サポートの理解，基礎研修テキスト，2022
- 8 ピア・サポート学会：ピア・サポートの理念 <http://www.peer-s.jp/> (参照日 2023. 9. 10)
- 9 松田優一：大学におけるピア・サポート普及の政策過程ー「政策の窓」モデルによる考察ー，桜美林大

- 学研究紀要 総合人間科学研究 1, 2021
- 10 岡本健：大学教育におけるピア・サポートシステムのあり方に関する研究－既往研究の整理と「北海道大学ピア・サポート」の実践から－，日本ホスピタリティ・マネジメント学会，第20回全国大会予稿集，pp.21-22 2011
- 11 公益財団法人大学基準協会：学生が学生を支援し，ともに成長する「ピア・サポート」，<https://note.juaa.or.jp/>（参照日 2023. 9. 10）
- 12 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して 第2版，ナカニシヤ出版，2020
- 13 中谷素之・伊藤崇達：ピア・ラーニング－学びあいの心理学－，金子書房，2013
- 14 滝充：改訂新版 ピア・サポートではじめる学校づくり 中学校編「予防教育的な生徒指導プログラム」の理論と方法，金子書房，2004
- 15 春日井敏之・増田梨花・池雅之：大学でのピア・サポート入門－始める・進める・深める－，ほんの森出版，2020
- 16 全国大学生生活協同組合連合会：第58回学生生活実態調査，2023
- 17 山田誠：西米良村での大学生イベントと青年期の自己形成－アクティブラーニングと対置する「深い学び」実践－経済学論集 98, pp.45-65, 2022

とみた さちこ

甲南女子大学文学部日本語日本文化学科講師

さなだ しげと

兵庫教育大学大学院学校教育研究科講師